

法然とその門下における「専修・雑修」理解

——特に隆寛・証空・静遍について——

本願寺派 那 須 一 雄

一 問題の所在

法然（一一三三—一二二二）が説き明かした浄土仏教の最大の特徴は「専修念仏」という言葉で表すことができる。この「専修念仏」とは、具体的には『選択本願念仏集』（以下『選択集』）二行章の末尾において、善導（六一三—六八一）の文に依り述べられるように、「雑修雑行」を捨てて「専修正行」に帰することであった。しかしこの「正行を専修」し「雑行を雑修」せずして「浄土往生を願う」という理解は、善導の起行理解をさらに思想的に純化させた法然独自の理解である。法然の教えを承けた門下の諸師は『選択集』等に示された、教義に関する重要な概念について、それぞれの解釈をすることにより、同門下の他師に対する自己の浄土教理解の独自性を示そうとしている。その際に、各自が自己の善導教学理解を明確にすることが重要なポイントとなっていた。従って、善導をもって嚆矢とし、法然によって再解釈される、この「専修」という概念について検討することは、門下の諸師にとって、自己の教学的基盤を形成する上で、非常に重要なことであつたと考えられる。本論では、まず法然にお

る「専修・雑修」理解の特色について確認し、次に法然の門下において互いにかなり密接な思想交渉があったと考えられる長楽寺流の隆寛（一一四八～一二二七）と西山派祖・証空（一一七七～一二四七）、ならびに隆寛や証空の影響を受けて法然浄土教に帰依したと考えられる真言宗の学僧・静遍（一一六六～一二二四）の三師が、この法然流に解釈された善導の「専修正行・雑修雜行」という教義概念を、どのように受容し展開していったかについて考察する。⁽¹⁾

二 善導における「専修・雑修」理解

善導における専修・雑修の解釈を理解する上で重要なのは、『往生礼讃（以下「礼讃」）』専雑得失の文と『観經四帖疏・散善義（以下「散善義」）』就行立信釈である。

まず始めに『礼讃』前序の専雑得失の文（真宗聖教全書〔以下「真聖全」〕①六五二（始めの丸内の数字は巻数、次の漢数字は頁数。以下、これに準ずる。））で善導は、「専」の者は、浄土へ皆往生できるが、「欲捨専修雜業者」は、ほとんど誰も往生することができないと述べている。⁽²⁾法然と比較する上で問題になってくるのが、この文章で「専」が指し示している行業の内容である。「若能如上念念相統」の「如上」が指しているものが、その行業の内容ということになるが、これは、この文の前の、安心について説いた箇所から、「若能如上」直前の文章まで（真聖全①六四八B1～六五一B1〔以下、Bの次の数字は後からの行数を、Lの次の数字は前からの行数を表す〕）を指すと考えるべきであろう。⁽³⁾従って、三心（安心・心構え）・五念門（起行・修行方法）・四修（作業・実践態度）がその中心であるといえる。次の問題は、この三心・五念門・四修とは、具体的にどのような内容のものであったかということである。従来この部分については、『礼讃』の日中讃で上中下三品の往生行を説く中の上品三生中に

「五門相統助三因」（真聖全①六七八）とあることを根拠に、三心が往生の正因であり、五念門が助業であると見
る。そして三心積の深信積中に説かれている称名念仏を、三心五念四修の中心行であると考へ、三心五念について、
『散善義』の就行立信積において五正行について示されるような正定業と助業の關係を見出そうとしている。⁽⁴⁾しか
し、『礼讚』の深信積は、「深心とは迷いの世界を出られない煩惱具足の凡夫が、下至十声一声の念仏を称えて、阿
弥陀仏の本願により救われることを疑わぬ心をいう」と、信について述べているだけであり、行について説いたも
のではなく、三心と五念門について、上記のような正定業と助業との關係を見出す解釈をするのは無理であろう。
「五門相統助三因」については、上品三生に説かれていることよりも、觀察門中心の五念門を相統して三心を助け
ると説いたものと見るべきであり、ここで説かれる行に称名念仏を見て取ることはできない。⁽⁵⁾

以上のようなことより、『礼讚』の「若能如上念念相統」（真聖全①六五二L1）の「如上」が指している箇所（真
聖全①六四八B1〜六五一B1）においては、安心（觀無量壽經（以下「觀經」）の三心）から発動する起行として
觀察門中心の五念門が示され、「三心五念之行を策する」ものとして四修法が説かれ、觀察門を成就することが困
難な衆生に対しては「専称名字」が勧められていると解釈するのが自然であろう。従つて、専雜得失の文における
「専」と「雑」は、以上のような内容の行業を修しているか否かを問題にしており、称名念仏を修するか否か、五
正行（正定業と助業）を修するか否かということの問題にしているのではないといえる。

次に『散善義』就行立信積（真聖全①五三七〜五三八）においては、正定業である称名念仏、ならびに読誦・觀
察・礼拝・讚嘆供養といった助業を専ら行すべきことが説かれる。そして正定業と助業（五正行）以外の諸の善行
は雑行として否定的に語られている。しかし注意すべきは、本釈が行について信を立てるために、さまざまな行業
を批判して説かれたものであるということである。則ち、五正行には三心から発動する起行としての性格は見いだ
すことができず、『散善義』の五正行と『礼讚』の五念門とは同じ次元で見えるべきものではないといえよう。⁽⁶⁾この

点は、後にも述べるように、法然と善導の専修雑修理解を比較する上で大変重要なことである。⁽⁷⁾

三 法然における「専修・雑修」理解

一 法然における善導教学の受容

法然の専修雑修理解を検討するにあたり、法然において善導教学がどのような視点から受容されたかを、安心と起行理解を中心に確認しておく。

(a) 安心と起行についての理解の展開

上述のように、『散善義』では三心から発動する起行は定散二善であるという記述のみだが、法然は、初期の述作（一一七五―一一八六成立？）とされる『三部経大意』では、至誠心に総（自力・定散二善）と別（他力・弘願）の二義を見る（昭和新修法然上人全集（以下「昭法全」）三四）。これが、一九〇年成立の『観経釈』になると、『凡三心通^{ハスル}萬行^ニ故^ニ、善導和尚釈^{スルニ}此三心^ヲ、以^テ正行^ヲ雜行^ニ二行^ヲ」（『観経釈』昭法全一二六）と述べ、三心全体に総（雜行）・別（正行・念仏）が対応するという見解が見られる。さらに一九〇八年成立の『選択集』になると三心章において、冒頭に「念仏行者必可^ス具^ス足^ス三心^ヲ之文」（真聖全①九五七）として『観経』三心の文、『散善義』三心釈（就行立信釈は略す）、『礼讚』三心釈を引用し、「私^ニ云^フ。所^レ引^ク三心^者、是行者^ノ至要也」（真聖全①九六六）と述べる。『選択集』では、この後、総別の二義についても触れるが、全体の文脈から読めば、三心が定散二善に対応するという見解は読み取れず、三心は二行章に引用された就行立信釈によって示されている念仏一行（別）に対応するという立場に立っているといえる。⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

(b) 起行理解の転換

一一九〇年成立の『大経釈』では、『散善義』就行立信釈を引用して、「私云。就此文有二意。一明往生相。二判二行得失」と述べ、以下、雑行を捨て正行に帰すべきことを述べ、称名念仏が正定業であることを論じる（昭法全八〇～八四）。

これが『選択集』になると、源信の『要集』を承けて、『礼讃』の安心起行作業論を受容し、源信が『要集』で五念門をあげたのと同じ意味で二行章に起行を示すものとして就行立信釈を受容する（真聖全①九三四⁽¹¹⁾）。ここにおいて就行立信釈は、浄土教理史上はじめて起行を示すものとして認識されることになる。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

二 法然における「専修・雑修」理解

以上のように、法然においては、特に起行についての理解において善導教学受容の特質が見られた。法然の専修・雑修理解の特質も、この起行理解の転換と関わりが深い。

まず『選択集』二行章を見ると、安心から発動する起行を示すものとして就行立信釈を冒頭に引用した後、私釈をし、さらに『礼讃』前序の「若能如上」以下の文を引用する（真聖全①九三四～九四〇）。そして「私云。見此文。弥須捨雑修。専修。百即百生。専修正行。堅執。千中無一。雑修雜行乎。行者能思量之」（真聖全①九四〇）と私釈をする。この文章には、善導教学からの専修・雑修理解の展開を二つ読み取ることができる。まず第一は、「須捨雑修。専修。百即百生。専修正行。堅執。千中無一。雑修雜行乎」と述べている点である。ここで法然は、「捨雑修專」百即百生」「千中無一」と『礼讃』の表現を用いながら、行を示す語としては、『礼讃』の語を用いずに、「正行・雑行」と『散善義』就行立信釈の言葉を用いて、「専修正行・雑修雜行」という表現をしている。この「正行を専修」し「雑行を雑修」せずして「浄土往生を願う」という立場は、就行立信釈を起行を示すものとして

理解して始めて出てくる立場であるといえる。第二には、『礼讃』の「若能如上」が指すものの理解についてである。右の私釈は、『礼讃』の「若能如上」以下の文章（真聖全九三九L4〜九四〇L1）についてのものである。この『礼讃』の専雑二修の文を解釈する中で「専修正行を捨てて」「雑修雑行を執する」ことを試めているということは、「若能如上」が指す対象も、『礼讃』に説かれる三心五念四修ではなく、『散善義』就行立信釈に説かれる正行と理解しているということになる。⁽¹⁴⁾ ここにも起行理解の転換をした法然の専修雑修理解についての展開を見ることが出来る。

このように、法然の専修雑修理解において特に問題になっているのは、専修・雑修する行とは何かということである。従って法然の他の述作における専修・雑修についての記述を見ても、「浄土ノ祖師オホシトイヘドモ、タゞヒトヘニ善導ニヨル。往生ノ行オホシトイエドモ、オホキニワカチテニトシタマヘリ。一ニハ専修、イハユル念仏ナリ。二ニハ雑修ナリ、イハユル一切ノモロモロノ行ナリ。上ニイフトコロノ定散等、コレナリ」(『大胡の太郎実秀の妻室のもとへつかわす御返事』昭法全五〇七)、「サテコノ正定ノ業ト助業トヲノゾキテ、ソノホカノ諸行オバ、……ミナコトゴトク雑行トナヅク。サキノ正行ヲ修スルオバ、専修ノ行者トイフ、ノチノ雑行ヲ修スルヲ雑修ノ行者ト申也」(『大胡の太郎実秀へつかわす御返事』昭法全五二三)、「このゆへに正行を行ずるものをば専修の行者といひ、雑行を行ずるをば雑修の行者と申也」(『浄土宗略抄』昭法全六〇一〜六〇二)、「専修といふは念仏也、雑修といふは念仏のほかの行也」(『津戸の三郎へつかわす御返事』昭法全五六八)というように、専修する上での心構えや実践態度については重点が置かれていない。

四 法然門下における「専修・雑修」理解

一 隆寛・証空・静遍相互の関係

始めに、本章で取り上げる証空・隆寛・静遍の当時の関係について確認しておく。

まず、証空と隆寛の関係は、法然への弟子入りは、証空が建久元年（一一九〇）、隆寛が建久三年（一一九二）以前と伝えられ、他の法然門下諸師に比べて早い。⁽¹⁵⁾そして証空は、建保元年（一一二三）西山善峰寺へ移るまで祇園の小坂に居住していた。⁽¹⁷⁾また隆寛は、法然が流罪に定まった承元元年（一一〇七）二月頃まで長楽寺の来迎房が居住の中心であった。この小坂と来迎房とはすぐ近くである。則ちこの二師は門下の中で、時間的にも空間的にも最も思想交渉をしうる関係にあった。また、嘉祿の法難（一一二七）の際、隆寛・幸西（一一六三～一一四七）・法性寺の空阿弥陀仏（生没年不詳）と共に、証空も配流の対象となっていた。このことから、法然滅後、証空・隆寛が共に盛んに自らの浄土教学を世に問い、広めていた様子が窺われる。

次に、静遍と証空・隆寛の関係は、『円光大師行状書図翼賛』の記述（浄土宗全書⑩九三）によれば、静遍は法然滅後、隆寛から『選択集』の講義を受けて、法然の徳に帰し、一向専修の行を立てて、心円房と号したと言われる。さらに証空との関係は、静遍が、禅林寺を証空（第十三世）に譲ったことが伝えられ、また両者とも仁和寺と深い関係があったことが知られている。また『当麻曼陀羅注記』の序分によれば、証空が静遍と関係の深い東密の研鑽を行っていたことが伝えられ、さらに証空の母・尾張局は、静遍の従姉であると考えられているなど、公私にわたり静遍との関わりがあった。⁽¹⁹⁾

以上のように、これら三師は、在世当時、互いに密接な思想交渉をしうる関係にあった。

二 隆寛における「専修・雑修」理解

(a) 隆寛における三心と行

既に論じたように、隆寛の著作を成立年代順に検討すると、『弥陀本願義』では、『観経』の三心と称名念仏との関わりが説かれていなかったのが、『具三心義』以降の著作になると『観経』の三心は称名念仏の行者の具すべきものとして強調され、この三心を中心に安心が考えられるようになる。またそこで説かれる三心は、特に至誠心を詳細に解釈する中で、真実心は、自力で起こすのではなく、阿弥陀仏の本願に帰することにより起こるものであることが強調される。それと共に、自力から他力へ、諸行・自力念仏から三心具足の称名念仏へ帰することが多くの箇所ですべられる。これに伴い、自力念仏・助業・雑行・定善等を修することよりも、次第に三心具足の称名念仏一行の価値が強調されるようになる。⁽²⁰⁾

このように、隆寛には、その著作の成立年次に従って思想的な展開があると考えられるので、以下、著作の成立年次に注意を払いつつ、隆寛の専修雑修理解について検討する。

(b) 隆寛における「専修・雑修」理解

まず『弥陀本願義』(一一二〇八成立)⁽²¹⁾では、専修とは第十八願に説かれる、信心決定し一向に専ら念仏を称えることであり、この状態になれば往生は可能とする。一方、第十九願には信心決定せず諸行を修することが、第二十願には信心決定せず念仏や諸行を修することが説かれ、これらの願に依る行法は雑修雑行・雑修諸行であり、往生は難いとする。但し雑修雑行の状態からでも、心を改め一向に専ら無量寿仏を念じたならば(第十八願の状態に転じたならば)往生は可能とする。⁽²²⁾ また正行と専修、雑行と雑修を同じようなものと見ている点も注意される。⁽²³⁾

次に『具三心義』（一一二一六成立）で注意すべきは、「雑毒の善、虚仮の行、未発真实心、難行道、聖道門、雑修、雑業、随縁の雑善、雑行、雑善」といった「専修」とは相反する意味を持つと隆寛が考える用語について、同じものとして捉えている点である。⁽²⁵⁾このような記述からは、身業と心業とを一体のものとして理解している隆寛の立場が窺われる。さらに重要なのは、これら「雑行雑修、雑業雑毒、雑善雑縁、虚仮」といった「専修」と相反する語について、「皆是不歸_レ真实願_レ不入_レ他力門」（遺文六）「皆是約_レ自力行_レ所立_レ其名也」（遺文一四）と述べ、自力的な行業として把握している点である。このような立場に立つ隆寛は、称名念仏についても、真实心（三心）を発さない時の称名念仏と、真实心を発した上での（即ち、三心を具した上での）称名念仏とを区別している。そして前者については、虚仮の行であり、雑毒の善であるとする。⁽²⁶⁾則ち、前者については雑修の中に入れていえる。このように三心具足の称名念仏を強調する隆寛ではあるが、『観経』の定善十三観、世親の『浄土論』の観察門等については、定善の行そのものが『観経』の三心的な性格を持つているから、単独で修しても往生は可能であると述べる。（遺文一四、二〇）但し、五正行中の助業を単独で修する場合は不可であるとする。（遺文一四）

さらに隆寛は、『具三心義』において、五正行以外の諸行について、他力の三心を具した上で修する場合には肯定的に捉えるという立場を示しているが、この点『弥陀本願義』から思想的展開が見られる。

また『散善義問答』（一一二七以降成立）における記述は、上の『具三心義』に述べられた立場とほぼ同じ立場が示される。ただ、余行を単独で修した場合は、あくまで「雑行」であり、「雑毒」であり、真实心の中に嫌う所の虚仮の行であるとしている点（遺文五二―五三）は、右の『具三心義』で明確でなかった部分を明確に説いているといえる。

最後に、『極楽浄土宗義』（一一二〇成立）においては、『具三心義』で明確に示されていなかった定善と称名念仏との関係が、定善は有智善人に限られるという点で称名に劣るということが述べられている点（遺文二七）、第

十九・二十願の行者が、行業を修する過程で、『觀經』の三心具足の念仏行者に廻心することを明確にし、特に第十九願の行者については、他力に帰して余行を捨てる行者と、三心を発して後、余善を修する行者との二種があるとしている点（遺文二三）等が注意される。

以上、隆寛においては、身口意の三業を一体のものと考え、他力の三心を具していない自力の行については、称名念仏も含めて、すべて否定的に考え、雜行であり雜修であるとする。一方、他力の三心を具した上で正助二業を修する場合は、正行であり專修であるとする。但し『觀經』の定善十三觀、『淨土論』の觀察門等は、行自体に三心的な性格がある故、単独の專修が可能であるが、定善は有智善人に限られるという点で称名に劣るとする。また五正行中の助業単独の專修は不可であるとする。正助二業以外の諸行については、他力の三心を具して修する場合には肯定的に捉えているが、この場合も、行業の中心には三心具足の称名念仏があるのであり、諸行を単独で修した場合は雜行であると考ええる。

三 証空における「專修・雜修」理解

(a) 証空における諸行開会の思想

証空教学の特色は、開会思想にある。「開会」とは「開拓会入」の略である。「開拓会入」とは、心を開いてすべての教えを受け入れるということである。⁽²⁹⁾天台学では『法華經』⁽³⁰⁾について、「為實施權・開權顯實・廢權為實」という三通りの見方をするが、この中の「開權顯實」という立場が「開会」思想を表している。「開權顯實（權を開いて實を顯す）」とは要するに、『法華經』の精神を知ったならば、三乘（声聞乘・緣覺乘・菩薩乘）の教えそのままが、一乘（唯一の眞實の教え）であるということが会得できるとする考え方である。⁽³¹⁾この天台学における開会思想を淨土教に持つてきて、特に行についての解釈に用いたのが証空である。

以上の点を踏まえた上で、以下、証空における専修雑修理解の特色について検討する。

(b) 証空における「専修・雑修」理解

まず証空の専修雑修理解を見ていく上で注意しなければならないのは、基本的に、証空においては、正行と雑行との区別は行体によってではなく、他力（阿弥陀仏の弘願）に帰しているか否かに依ることである。そして他力に帰したならば、すべての行業は正行、他力に帰していなかったならば、諸行は雑行であるとする⁽³²⁾。このような意味での正行を修していれば、自然と専修の状態になると考えている。さらに証空は、専修という状態は自分の力のできるのではなく、あくまでも阿弥陀仏の願力の働きによりなしうることであるとも述べる⁽³⁵⁾。そしてこの他力（阿弥陀仏の弘願）に帰入した心の状態というのは、『観経』の三心を得た状態であるとする⁽³⁶⁾。

また証空においては、阿弥陀仏の名号を称える行為、即ち称名念仏については、自力行という捉え方はされておらず、常に他力の行業という捉え方がなされているようである⁽³⁷⁾。この点、称名念仏にも、自力行と他力行とを分けて捉えた隆寛の立場とは異なる。

それでは、読誦・観察・礼拝・讚嘆供養といった助業はどうかと言え、これについても、もともと「正行」と考えられているため、自力行という捉え方はなされていないのではないかと。従って、他力に帰しているか否かで、正行か雑行かを判断するのは、あくまで五正行以外の諸行であるといえる⁽³⁸⁾。但し弥勒の宝号等、阿弥陀仏以外の仏の名を称える行為については、専修や正行に含まれる可能性は全くないと考えている⁽³⁹⁾。

以上、証空においては、阿弥陀仏の弘願に帰入しているか否か、『観経』で説かれる三心を具足しているか否かという点に、救済の分岐点を見出す。そして阿弥陀仏の弘願に帰入した者については、上述のような天台の開会思想に基づき⁽⁴⁰⁾、すべての行業について肯定的な見解を示していると言える。証空における専修・雑修は、このような立場に基づきながら説かれている。

四 静遍における「専修・雑修」理解

(a) 静遍と浄土教学

静遍には『統選択文義要鈔（以下「統選択」）』、『別異弘願集（以下「弘願集」）』といった浄土教関係の著作がある。静遍の浄土教学について検討する上で、確認しておかねばならないことは、以下の点である。①静遍は、法然没後（建保三年〔一二二五〕頃）に証空や隆寛の影響を受けて法然浄土教に帰入したという点。②法然浄土教に帰依している時も密教教学からは離れていなかった、則ち密教教学の立場に立ち浄土教を理解しようとしていた点。

③貞応元年（一二二二）四月に高野山に登って以降、貞応三年（一二二四）四月に亡くなるまでの静遍に、浄土教的な教学活動は見いだせない。密教教学のみであるということ。⁽⁴²⁾④則ち静遍が法然浄土教に帰依していた期間は、五〜七年程度ではないかと考えられること。以上のような点を確認した上で、以下静遍の専修雑修理解を検討する。

(b) 静遍における「専修・雑修」理解

静遍は、密教的思想基盤に立ちつつも、『統選択文義要鈔』という著作の題名からもわかるように、法然浄土教の理念を継承しているという自覚を持っていた。従って静遍にも、「専修」という教学概念が見られる。⁽⁴³⁾

静遍が説く「専修」とは、法然を受けて『大無量寿経』第十八願文に説かれる称名念仏を専修することであると⁽⁴⁴⁾考えられる。

この専修においては、行者の心のあり方、即ち貪瞋邪偽等の心を離れ心を至すという点、三心を具足しているか否かという点⁽⁴⁵⁾に注意が払われており、このような心の状態で修しない場合は、専修ではないと考えている。また静遍は、諸行については、真実心を得ないで修する場合には、否定的に捉えるが、心行相應の真実心を具して修せられる諸行、あるいは廢悪修善的な、念仏を中心とする日常生活を律していくための諸行については肯定的な立場を

取る⁽⁴⁷⁾。但しいわゆる同類の助業や異類の助業についても、これらを称名念仏と共に修したならば、「礼讃」に説かれる無余修を欠き三心を具していないことになるので、最終的には称名念仏一行を専修するという立場に立たねばならないとも説く⁽⁴⁸⁾。従って、静遍の説く「専修」には、念仏以外の行業は含まれていない⁽⁴⁹⁾。そして、ここで説かれる称名念仏は、密教的色彩の強いものであるといえる⁽⁵⁰⁾。

五 結 論

法然は、善導原文では起行を示すものとしては説かれていなかった『散善義』就行立信釈を、三心から発動する起行を示すものとして理解する。「正行の専修」、「雑行の雑修」ということは、このような起行理解をした法然において、浄土教理史上初めて出てくる行についての捉え方である。善導においては、「正行を専修する」ということも、「雑行を雑修する」ということも説かれてはいなかった。従って法然においては、「専修・雑修」について考へる場合、修する行とは何かということ、即ち何を正行として修し、何を雑行として廃するのかということが根本問題となっている。

これに対し、法然門下の隆寛・証空・静遍の「専修・雑修」の解釈は、行よりもむしろ安心（三心）の方に関心が向けられていることが、まず注目される。そして、三者共に、専修には『観経』に説かれる真実心である三心を具すべきことが強調される。この三心について隆寛・証空は、完全に他力的なものとして理解し、また静遍においても三心に他力的な意味合いを見出していることが読み取れる。そして、各師共に、念仏の行者がこの三心を具したならば、法然においては否定的な捉え方をされていた称名念仏以外の雑行についても、肯定的な見方ができるということについて、それぞれ独自の立場で論じている。

三師を比較すれば、隆寛・証空は共に、他力の三心を具していれば、称名念仏と共に諸行を修することは可能であるとすが、諸行についての肯定度は、証空の方がより強いといえる。また静遍は、真実心で修する諸行の重要性は強調するものの、諸行と共に修する称名念仏では三心を具足したことになるかと理解している。

このように、法然においては、行の問題であった「専修・雑修」の問題について、その門下の隆寛・証空・静遍の三師は、これを安心の面から再解釈し、その結果として、その度合いには違いがあるものの、各師共に諸行を肯定的に理解する方向に思想的な展開をしていったことが確認されるのである。

註(1) なお同じ法然門下の弁長(一一六二―一二三八)、長西(一一八四―一二六六)、親鸞(一一七三―一二六二)、聖覚(一一六七―一二三五)の「専修・雑修」理解については、既に「聖光房弁長における専修理解について」(宗教学研究三三五)、「覚明房長西における専修理解について」(宗教学研究三三九)、「聖覚と法然・親鸞」(印度学仏教学研究四四―)において論じた。

(2) 「礼讃」専雑得失の文では「専」「修雑業」「修雑不至心者」、「散善義」就行立信釈でも「一心専」という語があるのみで、「専修・雑修」という語は用いられていない。但し「散善義」就人立信釈には、「盡此一身専念専修」(真聖全①五三七)、「法事讃」には「専修浄土因」(真聖全①六一)、「般舟讃」には「三業専修無間業」(真聖全①六八八)という用例がある。なお善導の弟子懷感(生没年不詳)の「积浄土群疑論」には「礼讃」の専雑得失の文に関して「専修・雑修」という語を明確に使っている。(善導禪師勸諸四衆専修西方浄土業者……雑修之者萬不一生専修之人千無一失……是知雑修之者……若不雑修、専行此業……)(大正新脩大藏經(以下「大正藏」)四七卷五〇C)。藤田宏達『人類の知的遺産⑱善導』講談社、三三六頁参照)

(3) このような解釈が、法然以前の仏教における一般的な解釈であったことは、源信(九四二―一〇一七)が『往生要集』(以下「要集」)第十問答料簡において、「導和尚云若能如上念念相統畢命為期者十即十生百即百生。若欲捨専修雑業者百時希得一二千時希得三五。言如上者指礼讃等五念門至誠等三心長時等四修也」(真聖全①八九七―八九八)と述べていることよりも明らかである。

(4) 例えば、普賢晃寿『日本浄土教思想史研究』二六七頁。

- (5) 『礼讚』の行業論については、拙稿「法然に於ける善導教学の受容について」(真宗学88)において概要を論じた。
- (6) 就行立信釈は、『礼讚』の三心五念四修で言えば、深信釈で称名念仏の行を説き明かす部分に相当すると考える。ここでは、『散善義』において、『礼讚』の五念門に相当する部分はどこかと言えば、定散二善であると考える。これは『散善義』において、『観無量寿経』(以下「観経」)の三心について説明した後、「三心既具、無行、不成願行既成、若不生者、無有是处」也。又此三心亦通摂、定善之義。応レ知。(真聖全①五四一)(現代語訳)上の三心がすでにそなわるならば、行がすべて成就しないことはない。願と行がすでに成就しているのに、もし往生しないというならばそれは道理にあわない。またこの三心は「散善の心構え」として説かれているが「定善の(心構えとしての)」内容にも通じるのである。よく知るべきである。(※以上の訳は、藤田安達(註2) 書三〇一頁L2~L5に依る)と述べていることよりもわかる。
- (7) 以上本章、坪井俊英「善導浄土教における五正行説組成の意図と法然の受容」『石田充之博士古稀記念論文集・浄土教の研究』、拙稿(註5) 論文、拙稿「日本浄土教に於ける五念門・五正行の受容と展開」(龍谷大学大学院研究紀要・人文科学14)、拙稿「法然の五念門観について」(印度学仏教学研究52-1) 参照。
- (8) 「此三心者、総而言之、通諸行法、別而言之、在往生之行。今、挙、通摂、別」(真聖全①九六七)
- (9) なお、(註8) は以下のように解釈する。「総而言之、通諸行法」は、「一般的には『観経』の三心は諸行(定散諸善)全体に対応するもの(諸行全体の心構え)と解釈できるが」、「別而言之、在往生之行」は、「特別にいうと念仏一行に対する心構えである」。「挙、通摂、別」は、「諸行全体に対応する心構えと一般的には解釈される『観経』の三心をあげているが、実はこの三心には念仏一行のみに対応するという特別な解釈の仕方があるのだ」。
- (10) 以上のような展開は、法然教学の他力易行道的展開といえるだろう。このような展開は、浄土往生のための行業と九品の浄土についての法然の理解でも見られる。(拙稿「法然上人における『観無量寿経』九品段の解釈」(龍谷教学33)。※なお上記論文の65頁B1と66頁L1が筆者校正終了後に入れ替わってしまったことを遺憾に思うと共に、その旨をここに指摘しておく。)
- (11) 従って、『要集』で起行として受容されている五念門については、『選択集』では全く触れられていない。『昭法全』中、法然の『要集』についての解釈箇所(『往生要集』四種釈書、『一期物語』)以外で、五念門について触れているのは、『聖光上人伝説の詞』(昭法全四五九)と『良忠上人伝開の詞』(昭法全七六一)程度である。(第八輯・伝法然書編)は除く。)

(12) 先にも述べたように、五念門は安心(三心)から発動する起行であり、また一念仏を五つの面から眺めたものであるのに対し、五正行というのは深信を確立するために、さまざまな行業を批判して説かれたものであるので、善導原文では同じ次元で見るべきものではない。従って、就行立信釈における五正行では、「読誦」「供養」といった念仏以外の行業も示され、また雑行についても批判的な立場が説かれるのである。

(13) 以上本章、「註7」の拙稿、ならびに、拙稿「三部經大意」と「登山状」(宗教学研究三〇七)、「法然における総別の二義解釈」(宗教学研究三二二)、「法然における五番相對と六番相對について」(宗教学研究三四七)参照。

(14) 同様の立場を示すものとして「大經釈」の「次判三行得失者、若修前正助二行……若行後雜行……案此意、就正雜二行有五番相對。……又善導和尚往生禮讚中細判三行得失。謹案此文云、若能如上念念相續畢命為期者、十即十生百即百生。……」(昭法全八二〇八四)、「淨土宗略要文」の「四善導和尚、判正雜二行得失之文。往生禮讚云、若能如上念念相續、畢命為期者、十即十生百即百生……」(昭法全三九八)がある。

(15) 石田充之『法然上人門下の淨土教學の研究』上巻二四五頁、一九七頁参照。

(16) 慈円(一一五五―一二二五)の譲りをうけ善峰寺の中尾・蓮華寺院に移り、承久三年(一二二二)頃以降に北尾・往生院に住した。当時、善峰寺は、南尾・法華院、中尾・蓮華寺院、北尾・往生院に分かれていた。(『文殊堂・善峯の寺宝』西山善峰寺、二七―二八頁参照)

(17) 「小坂」の地については、『日本歴史地名大系27』(平凡社)では、「確定しがたい」としつつも、「綾小路宮小坂殿の所在から現祇園神幸道辺り」(同一九六頁)と推察している。「綾小路宮小坂殿の所在」とは「四条と祇園中路と綾小路並びに鴨川を区切る祇園社領の中の東寄りの一角」(同二六八頁)、神幸道とは八坂神社南側の道である。

(18) 来迎房の位置は、高台寺の北面の門があった辺りとされる。(『新淨土宗辞典』五五〇頁) 福原隆善氏によれば、建久元年(一一九〇)には長楽寺に入っており(『淨土仏教の思想』⑩弁長・隆寛』二三五頁)、承元元年(一二〇七)青蓮院の中の坊へ移ったと言われる。(『淨土宗大辞典』③四五二頁)

(19) 以上、拙稿「静遍と法然淨土教」(印度学仏教学研究53―2)参照。

(20) 拙稿「隆寛における三心と行」(印度学仏教学研究42―1)参照。

(21) 親鸞の『観経・弥陀経集註』を除けば、『陀本願義』は、法然門下の著作中、法然在世中に著された唯一の著作である。

(22) 「第十八念仏往生願者……以称名爲往生業之士……是即十方衆生……乘称名往生願爲増上縁。欲令易無漏無爲極

楽浄土也」(隆寛律師遺文集(以下「遺文」)一〇二)。「第十八願雖限專称名号之行仏意猶広大仮令初修余行後廻向我願必垂来迎。然則一向專念無量寿仏以後與第十八願不異也。以余行余業不為往生正因旨甚明。……第二十條念定往生願者……聞名係念雖似法藏本意猶雜修諸行。此人信心不決定恐難得往生。是故法藏比丘願云縱因者信心雖一向廻心發願一向專念無量寿仏願生極楽必令果遂也。○問第十八願……平等令称名号偏為一向專修機所發誓願也。第十九願……或修萬行諸波羅蜜……此人忽改心其廻前所修行業願生極楽。為其所發誓願也。第二十願……今見世間聞弥陀名字雖係心其國信心一向修諸功德、以求生極楽。是即善導和尚所立雜修雜行人也。信心移諸行不決定。信心乱萬縁不純厚。指此為千中無一人。而此人忽改其心一向專念無量寿仏願生極楽国土。法藏菩薩為其所發誓願也」(遺文一〇五～一〇六)

(23) 「第六言二行者、一者正行二者雜行……亦名二修一專修二雜修」(遺文一二五)

(24) 「三明不發真實心之過失。……是故名雜毒善……是故名虚仮行……是故名不名真實業也。曇鸞以此二名難行道、……道綽以此一名聖道門……禮讚中以此一名雜修。亦名雜業。……法事讚中以此一名隨縁雜善……深心中以此二名雜行。亦名疏雜行……以此一名願往生心」(遺文五〇六)「今疏对正行立雜行。礼讚对專修立雜修。選択集对純立雜。謹案斯義雜行即雜善。……又指此雜行亦名雜修亦名雜業。……此豈非雜修即雜行雜行即雜業之證乎」(遺文一四)

(25) 従つて、「散善義」の「外現内懐」の文についても、「三業所為之善名為外、三業所有之惡名為内」(遺文六)と述べる。

(26) 「問外現精進内懐虚仮唯限余善不通念仏耶。答不發真實心之時称名念仏屬虚仮行、損雜善。第廿願中間我名字係念我國修行六念中念阿弥陀仏等是其証拠也」(遺文六)「問就念仏行、有不具三心之人乎。答念仏有二種。一本願念仏二非本願念仏。非本願念仏者六念中念阿弥陀是也。本願念仏者三心具足念仏今所論也」(遺文二)

(27) 「正行具三心其理必然。就雜行案之、自利真實中余行又具三心無疑。唯所嫌者未發真實心時自力之行也。深心中云若行後雜行回向得生、此即指上自利真實中余行也。廻向他力之時諸行皆歸本願無不往生」(遺文二〇)

(28) 反対に、真實心を發さない時の自力の行は、往生行にはならない、則ち雑修であると考えているといえる。

(29) 以上、梯實圓『法然教学の研究』三四八頁等参照。

(30) 以下の記述は、梯實圓『法然教学の研究』第六章の第四節、ならびに日下大癡『台学指針』第二章の第二節を参照。

(31) 中村元『仏教語大辞典』一七〇頁参照。

(32) 「雑行非嫌善體。自力執心未捨。雜毒之咎難レ遁。縦修ニ甚深妙行ニ雜毒故難レ成、簡淨土一門正行外諸行ニ立為レ雜行也。不定何善何行」(『散觀門義』西山全書(以下「西全」)③三三九)。「觀門の解を發し弘願に歸する人の心には、実に一切の善根は、皆正行と云ふべきなり。自力修行の人の心には、一切の善根は、皆雜行と云ふ事は一宗の大事なり」(『觀經疏大意』西山上人短編鈔物集(以下「鈔物集」)三四〇三五)

(33) 上述のように隆寛も、他力の三心を得た後に修する五正行以外の諸行について肯定的な見解を示しているが、これらの行については「余行・余善」と述べるのみである。(例)「就二十九願有二種義、一者歸他力捨余行方以此人一同行願機、二者發三心後猶論余善既發三心故雖論余行異邊地機」(遺文二三)。この点、他力に歸したならば、すべての行業を「正行」と呼ぶ証空の立場は注意される。なお法然にも、「十二問答」(昭法全六三三)のように、信心を得た上で修する行業は、五正行に説かれる助業以外の行業でも助業になるのであり、雜行にはならないと説いている文もある。しかしこの文章は「問ふ、余仏余經につきて、善根を修せむ人に、結縁助成し候ことは、雜行にてや候べき」という問いに対する答えの中での文である。則ち、この答えの中で問題の中心となっていることは、往生行についてではなく、余仏余經に歸順するか、阿彌陀仏に歸順するかという問題であることに注意しなければならない。

(34) 「一。二行得失等云事。云云正行得、心常親近等者、修正行者專修自成之故得也。雜行失者、心常間斷等者諸行雜緣亂動正念間斷。無親近義故墮雜修失也」(『散善義他筆鈔』西全⑤三三二)

(35) 「今云念念不捨、正此親縁益也。故凡夫心似間斷、不斷光益、以三捨力成相續無間業。不然者一時煩惱百千間機上專修義不可成。……正念相統依成一念業也。一念業全願力功也。不然者聞名往生、如何可意得一哉」(『散善義他筆鈔』西全⑤三三二)

(36) 「依觀門所成行者心謂三心。依此三心歸弘願定散二善體、納三心悉成。指是歸弘願也。然定散體即弘願也。弘願者四十八願也。此弘願成體阿彌陀也。然定散所開觀門歸三心、三心歸弘願、弘願歸阿彌陀也」(『玄觀門義』西全③二二)

(37) 「念仏と云ふは他力なり。他力と云ふは我が心を本とせず」(『述誠』鈔物集八二)「然るに仏の覺体成じ給へる処を押へて衆生の行体と定むる故に念仏三昧の他力行とは云ふなり」(『述誠』鈔物集九一)

法然とその門下における「専修・雜修」理解

六〇

(38) 「助正助下、上既明正行竟。雜行體未顯。正助雖異、共正行相、除此正助、指外諸善名、雜行也」(『觀門義』西全③三四一)

(39) 「若有西方行人、具三心、乘願力、可願往生。而其人假令在起行位、專念彌勒、寶号、為畢命為期、勤此可許、三心四修、具足雜行、專修一歇。爾者此人、信彌陀本願、乍願西方往生、專念彌勒、為成專修業、依無余無間之作業、還以不念彌陀、擬決定往生業、安心起行牛角、豈必本願之道理哉。……知如此有行者、於今宗者、雜行雜修至極也。千中無一謂也。此許百即百生行之條、迷倒甚哉。此義大失也」(『散善義他筆鈔』西全⑤三三三)

(40) 証空が、諸行について肯定的な見解を示した、もう一つの根拠に、『散善義』と『禮讚』の廻向發願心積の文があると思われる。証空は、至誠心積で捨てられた諸行が廻向發願心積に於てその価値を再認識されていると理解し、諸行容認の根拠としている。(例えば、『五段鈔』鈔物集一六四、一七一、『觀經疏大意』鈔物集三六〇三七等)

(41) 『弘願集』の著者が、花光房淨遍ではなく、禪林寺淨遍であるとす理由としては、以前、拙稿「淨遍と法然淨土教」(印度學仏教学研究53の2)の〔註1〕で八項目ほどを要約して示したが、以下この点について補足・追加をしておく。まず⑤金沢文庫蔵本の「淨遍」は誤伝、誤写の可能性が高い(上掲誌五六五頁)と述べたこと理由としては次のようなことがあげられる。第一に、金沢文庫蔵本の『弘願集』は、淨遍滅後約三〇年後の建長六年(一二五四)に書写されたものであること。第二に、「淨」の同字に「滯」という文字があること。第三に、金沢文庫蔵本において「淨遍」という名前が出てくるのは、本書の原文の部分ではなく、本書を伝写した者によって記された尾題の「淨遍僧都別異弘願集」(金沢文庫資料全書・仏典・第四卷・淨土編①(以下「金沢」三三三))という部分のみであること。以上のような理由により、伝写する段階で「淨遍」が誤伝または誤写された可能性が高いと考える。また著者を禪林寺淨遍とするもう一つの理由として、青蓮院に著者名は記されていないが、淨遍に教学的な影響を及ぼした証空や隆寛と生前関係が深かった慈円が書写したと推定されている『弘願集』がある(石田充之〔註15〕書・下卷一九〇頁)ことをあげておきたい。則ち、証空や隆寛との関係から考えて、慈円の書写本があるということは、本著が禪林寺淨遍である可能性が高いということである。また本書の成立年時は、『般舟讚』の引用があることより『般舟讚』が発見された建保五年(一二一七)以降であり、慈円の筆であれば、慈円が没した嘉祿元年(一二二五)までということになる。則ち本書の成立は淨遍が法然淨土教に帰依していた頃である可能性が高い。

(42) 貞徳元年四月に高野山に入つて以降の静遍に、浄土教に関する活動や講義の記録は見当たらない。密教教学に關するものみである。当時、明遍(一一四二—一二三四、六月)は健在であつたはずであり、この点は、静遍の思想展開を見ていく上で注意されるべきことであろう。

(43) 「今云因地時者、実修之初。頓捨身財、実証之終。求妙法者、仏選要法、久遠実成專修念仏。三業專修無間業者、令声不絶具足十念。種々安慰爲說妙法、經說分明。」(「統選択」一) 一「古叢」一九。「自三毒発処諸惡罪惡生死之凡夫習自由。恃他力云、終口称三昧念々專修行。廢、実可畏返々可悲。」(「弘願集」金沢二七) 一「今云観仏除罪雖依願力、心相統義猶限三念仏。称名易故相統即生積、更不可違。第十八爲願王、義弥可成乎。一義、想観非智、憶念口称。三摩地念誦是也。」(「統選択」古叢三三)

(44) 静遍の三心理解は、真言宗的な立場に立っているため、基本的には自力的な色彩が濃い。「他力者還 弥陀名号云也。聞得、深可恃。此三心具足云也。」(「弘願集」金沢三三) というように他力的な一面も見られる。(石田充之(註15) 書・下巻二八六頁参照)

(45) 「三心者余雜行全不具也」(「弘願集」金沢二九) 「称名念仏一行不絶懇懃修人自三心四修備也」(「弘願集」金沢三一)

(46) 静遍は、念仏以外の行について次のように分類する。まず称名念仏と兼ねて修する行を「善の雜行」と「惡の雜行」に分ける。前者は、いわゆる同類の助業と異類の助業と言われるもの、後者は、貪瞋邪偽の心を持ち心行内外不相応の状態で修する諸行である。そして念仏門に入っていない人の日常生活における種々の実践行については「雜行」とは言わない。雜行とは正行である称名念仏と兼修する場合にのみ言われる。(石田充之(註15) 書・下巻二八八頁参照) 「此洲人間可五類、一者生々世々間三福善植正因人今生未入念仏門、……念仏宿善成也。……三者念仏雖修兼善雜行故……四者雖行念仏三毒煩惱不伏六境六入群賊惡獸害、惡雜行重故……」(「弘願集」金沢三二) 「今云十三定善勤極樂果、九品散善助往生因。往生極樂皆異方便、俱廻証入。上卷定散分別以之可証」(「統選択」古叢三一)。「一過雜縁乱動失正念故於雜縁有二。一者惡雜縁貪瞋違境也。二者善雜縁極樂弥陀外余仏諸行也。正念者一向專念弥陀名号也。余諸行事長勤煩順、逆縁自來間故名雜業非云余行自體、雜也。得此意時雜義無二。唯雜毒之一事也。尋常念仏者不知此義一切功德、謗輕惡捨、自三毒発処諸惡、罪惡生死之凡夫習自由。恃他力云、終口称三昧念々專修行。廢、実可畏。返々可悲。三世諸仏出離生死惣行即弥陀如来爲別異弘願。愚能小智我等衆生聞広行聞難悟故、諸仏即一仏顯無生徳、假名号一行數之給也。故起信論者諸仏如来有勝方便説也。無勝

方便者、迷衆生悟取事、不可叶故也」(『弘願集』金沢二七)。「慎心輕自由スル事ナカレ。三業業道分明也。アザムクベカラズ。何以故近来自見聞諸方道俗修行不同、專雜有異、但心專作者十即十生修、雜心至者千之中無一……仰願一切往生人等能自思量、己能、今身彼國生願者行住座臥必須勵心尅己、莫晝夜廢畢命為期上在一形……百即百生百一二千中無一三類也。初一類本願一行稱名正業第二類異類助行雜行同類助行禮誦等兼行人也。念仏一行不廻入アヒタハ一二ヲモ実、不可得。廻入者百即百生但念成也。同異助行又親疎二雜行。第三類為本願念仏一宗至イハドモ実、心行不相応、真実心エザル人也。是惡雜行兼行、近惡念仏類也。正行念仏助行善雜行也。貪瞋邪偽等三業不調、兼行惡雜行也。此三重不同為令知。雖出三類、理実、只往生唯正行稱名一人也。同類助行尚以不可成決定信。善導所判分明也。……三者念仏雖修兼善雜行故、最後一念尚不得調人界返。雜行報償了一向專念念仏者ナル。先百生同。故決定往生。是又可希二百希一二エ千希三五ウトハ積給也。上委聞此人無余修積故三心又不備也。……四者雖行念仏、三毒煩惱不伏、六境六入群賊惡獸、害惡雜行重故念仏法也、輕被引三惡道還。又一人無往生人故千中無一知也。……五者一向惡行、聖道淨土二行共無人者心地觀經說、有情輪廻生六道……」

〔弘願集〕古叢三〇(三三)

(49) このように同類の助業や異類の助業を称名念仏と共に修する場合は專修にはならないと考える靜遍の立場は、上の隆寛・証空とは違っている。

(50) 「凡念仏有四種。一者係念。如先已云、此本願一行三昧一向可勵、想心不絶、公仕、親孝交友、隨事、未一縁成就時、係念真実、蒙仏攝取也。二者聞名。自唱自耳聞也。三者称名、舌計ハタラカシテ唱也。四者心計六字名号縁、氣出入不絶。此真実深信究竟之念仏也。息必口出入、故、四種皆口称三昧一行也」(『弘願集』金沢二九)。「九生死涅槃不隔門……又云、行住座臥心相統、極樂莊嚴自然見、或想或觀、除罪障。皆是弥陀本願力、以仏力、故成三昧、三昧得レ成、心眼開。今云觀仏除罪雖依願力、心相統義、猶限念仏、称名易故相統即生積、更不レ可違。第十八為願王義弥可成乎。一義想觀、非智。憶念口称。三摩地念誦是也」(『統選撰』古叢三二(三三))